

パトリシア・リード

## 自由とフィクション

「一文化の諸コード—すなわち、その言語（ルビ：ランガージュ）、知覚の図式、交換、技術、価値、実践の階層的秩序（ルビ：イエラルシー）を支配するもの—は、最初からひとりひとりの人間にたいして、彼がかかわり、そのなかに自分自身をふたたび見いだすような（“...within which he will be at home”）、経験的秩序というものを定めている。」 [1]

フーコーが『言葉と物』の序章で言及する **home** は、言説上のものだ。それは歴史的あるいは時代的な **home** だが、非私人化されている(*deprivatized*)がために、まさに家内的(*domestic*)だ。この歴史的・言説的な **home** は、「諸存在の繁茂を手加減してくれる」図式として作用する。それは「語や知覚や身振り」に先だつ、与えられた秩序の空間であり、その特定の秩序の「巧妙な」表現であり、「それらにはっきりとした形[...]をあたえようとこころみる理論よりも、はるかに鞏固で古い、疑問の余地のすくない、つねにより『真実な』ものなのだ。」 [2] フーコーのいう **home** は、さまざまな物の関係の自然発生的な文化的経験が構造化されるアプリアリ（先験的）なモード、それらの関係の分類（同一性と相違性の体系）、そして「ここで問題と」 [3] すべき原理である。この **home** は、世界がいかにナビゲートされるか（規範的、標準的な重みづけによっていかにナビゲートされるべきかと同様に）に適用されるコードとしての秩序の自然化(*naturalization*)であり、それらのコードの知識が配列されて創造される方法である。そのような周期的な *domus*（家屋）に彼が与えた用語が、*epi*(上の)と *histashtai*（立つ、または置く）を組み合わせた「エピステーメー (*episteme*)」である。

エピステーメーは知の歴史というよりはむしろ、知を特定の方法で可能としてかたち作る場の条件である。すなわちそれは「概念、理論、学問の目的を形成するルールを決定する」ものだ。 [4] それは、知が実定的(*positively*)に根をおろし、ひとつの歴史的時代（たとえば古典時代や近代）を識別するための整合性(*coherence*) [5]を与える場なので

ある。エピステーメーが含意する「家内性(domesticity)」は、固定的に囲われた構築物ではなく、特定の知の構造の構築を支える基本的な空間であり、何を考えるのが可能または不可能なのか、何が問いに関係するのか無関係なのかがそこで決定される。あるエピステーメーの中で物の配列を操作することはでき、表面の変化の度合いを経験するのも可能だが、パラダイムの変化は、思考を構築する際に主に参照されるレベルの場で起こる。知を可能とする条件を秩序づけるにあたっては、場が決定的な影響を及ぼすことから、フーコーは実定性 (positivity) の根本条件をよりよく理解するための考古学的または言説的な掘り起こしを主張する。思考と文化の関係についてエピステーメーは、もはや知の直線的な発展が前景にあるのではない、それに代わる枠組みを提示する。その枠組みは不連続性[6]を（ある考えをもはや抱くことができない、または以前と同じような推論が行えない歴史的瞬間がある限りにおいて）前提とするものだ。フーコーは、これらがなぜ可能または不可能なのかを、「私たちにとってもっともなじみのある行動を決定して[...]、その成立、我々に課す制約を示す暗黙のシステム」を理解しようと試み、そのなかで「どうしたら逃れられるかを示すために」自己をそれらから「距離を置いたところに(at a distance)」に位置づけようとする。[7]

シルビア・ウィンター(Sylvia Wynter)はこのエピステーメーを取り上げ、その原理を人間-概念そのものと結び付け、人間が文化的/歴史的にいかに関係されてきたかと、その自己認識の本質 (nature) との重要なつながり (link) を引き出している。この関係があるからこそ、社会が大きく変革する際に必然的に必要となるのは、言説的・概念的な枠組みのパラダイムシフトであり、そのパラダイムシフトを通じて「人間であること」についての特定の概念が考え出され、実践されるとウィンターは強調する。[8] ウィンターはこれが「人間であることのジャンル(genres of being human)」だと断言する。この理想化された人間の形態(figuration)は、人間の形(form)とそれに「ふさわしい」一連の行動のテンプレートのような働きをし、それを再生するモードは、理想化された概念への適合を促す社会組織構造によって強化される。この正のフィードバックのループ、またはウィンターが（フランツ・ファノン(Frantz Fanon)に倣い）社会的要因によって引き起こされる(sociogenic)原理[9]と名づけたものは、人間の理想化の特定のモデルをう

まく取り入れる一方で、その存在化(ontologize)や家内化(domesticate)の力に適合しないすべての生き物や存在 (beings and entities)が「他者化」 (other)される。エピステーメーの言説の基盤と同様、この人間の理想化は、与えられた不変のものだと想定されている。それは人間が自己参照するための実定性の神聖な場であり、前述の人間概念のテンプレートという「自然の事実」に従って知識が重みをもつ。この考え方をウィンターは「ジャンル特有の真実の秩序(genres-specific orders of truth)」だとみなしている。[10]

この当てはめ可能で、ジャンルに**適合した/ジャンルを確認する**「真実」のプロセスにより、これら「ジャンル特有の真実の秩序」（一般的な真実の追求とは反対に）を複製する際に知識人が役割を果たしていると、ウィンターは（自己）批判的に指摘する。この批判は、「No Humans Involved」と題された彼女の公開書簡に、次のように明確に記されている。すなわち、「内なる目」（与えられた人間-概念の分類法）の実証

（corroboration）にアカデミアは共犯者として加担している。その「内なる目」を通して現実はただ見られるのではなく、多くの場合、理想化された人間のジャンル-概念というテンプレートに適合しない、またはそのテンプレートの中で動くのではない「周縁の(liminal)」生き物や存在に対する無知や無視に基づいて評価され、語られ、仕分けされ、構成される。[11] 人間のジャンル-概念がエピステーメーに先行するのであれ、あるいはエピステーメーが人間の自己概念を類似のものとして生み出すのであれ、そのどちらも社会認識の歴史的再生産の原動力である。ウィンターによれば、どちらも地域特有で、すべての人間の文化に伴うものであり[12]、どちらも世界を考えるための主要な枠組みとして機能しており、考える際には、何が正当で、適切で、真実で、自然で、関わりがあり、必要であるという理解を決定する知の秩序は、その枠組みから導き出される。

地政学的優位性は、この自己強化、再生産のメカニズムを通じて成立する。それが成立するのは、地域特有的なあるエピステーメー・人間概念が膨張して、物質的にも概念的にも地域の外に強制されるときである。これが、一方的なグローバリゼーションの簡潔な説明である。[13] この地域特有的なエピステーメーの膨張拡大を通じて、持続的で

包含的な19世紀ヨーロッパの人間概念（Wynter はこれを **Man2** と称する）は人間を存在化し、自由なモノヒューマニズム、ホモ・エコノミクス（経済人）として現れる。このように膨張した「人間であることのジャンル」が生み出したのは、「合理的または不合理的、選ばれし者と選ばれざる者、持てる者と持たざる者の人種別[そして性別]のカテゴリーで、それは非対称的に取り込まれた人種的-性的人間集団として[...]蓄積の上に繁栄する者にますます従属するようになっている。」[14] 今日、このモノヒューマニスト-人間の形態(**figure**)は、全体的な規模で広がり、「私たち」と一くくりにされる人間の外側に、概念的、政治的、社会的に適合しない（またはその中で活動しない）生き物や存在を置いている。特定の「私たち」は、理想化された人間のジャンル-概念に基づいて全体の一部に取り込まれる。だが実際は、この「私たち」とは、特定の「人間であることのジャンル」に従った「当てはめられる真実(**adaptive truth**)」を強化したにすぎない。その危険性とは、単にこの「私たち」が部分としてではなく、地域特有で、指示対象となるその「私たち」が、人間の種全体と同じに扱われることだ。これが、**新世(Anthropocene)**における人類のなかの、非歴史的でモノヒューマニストな「私たち」だ。[15] ポスト核時代の生き物としての人類は今や、気候上の危機に直面しているが、ウィンターは、その人類は歴史上初めて共通の環境に直面している、たとえ直面する危機の深刻さに大きな程度の差はあるにせよ、と指摘する。この事態に直面するにあたっては、「人間であること」の新しいジャンル、あるいはそれにふさわしい自己比喩的(**self-troping**)なモード[16]—しかも惑星の尺度に合わせた—[17]を発明しなければならない。問題は、モノヒューマニスト-人間の膨張するテンプレート（これが、今の共通の環境を創り出す、理想化の触媒としての責任を有している）を単に繰り返すのではなく、いかにして惑星の尺度に合わせた自己比喩的な人間のジャンルを作り出していくかだ。

## 歴史の不完全性の構築

エピステーメー（それに特有の人間-概念も含め）を掘り起こすことは、それらの（特定の）歴史的連続の構築に向けて制約的な習慣を断ち切り、思考の可能性の自然化と仮定の空間を理解することである。レザ・ネガRESTANI（Reza Negarestani）によると、歴史の問題、より正確には「歴史を持つことの意味」に取り組むことは、その非合計化(detotalization)のために努力し、必然性の認識に対抗して努力し、それを目録化された事象の単なる承認（たとえばモニュメント化により）から解放することによって、その不完全さを認識し、そして過去には見えなかった経路へと目的を再設定する(repurpose)ことだ。[18] そのように歴史の再目的化は、それを認識に理解させ得るかどうかにかかっている [19]。とくに最も表層的な認識からすらも意図的に取り除かれた歴史を理解できるかどうかだ。理解可能な歴史、つまり、現在の世界の布置(configuration)につながる「活動、判断、決定、対立、価値および変数の内容認識」[20]の経験は、ネガRESTANIが書いているように、この歴史（「テクノサイエンス、経済、政治、倫理、社会闘争」のアマルガム(混合物)）の再構築を認識する主体に説明するモードが必要である。[]このエピステーメーを理解可能とする活動は、既存のエピステーメーの所与性を構成する一見閉じた実定性のシステム内で偶発事象(contingency)を認識し、可能性を実現するために不可欠な手順である。それは、歴史的再構築（モニュメント化するのではなく、繰り返すために）が経験として必要なためである。その再構築にあたっては、概念規模において、そして世界を推論(reason)するために使用されるツールそのものと技術において、非史実性に対する警戒が必要となる。世界を「見る、命名する、知る」ための非史実化ツールは、シミュレーション・スペースにおける人間モデル-身体の空化(emptying out)に関する見解をノラ・カーンが示しているように、差別的(differential)人間経験の範囲を通じて、偽りの中立性(neutrality)を強化する。[22]テクノロジーに裏打ちされ、客観的な(detached)中立性と均一性の認識が「中立」としてのみ通用するのは、それが埋め込まれたエピステーメー（およびその存在論的に表された人間ジャンル）の「当てはめられる真実」の表現であるためだ。

思い起こしてみると、フーコーにとって、歴史に条件づけられる一般化された場は、知に先立つ(anterior)制約として機能する。そこでは可能性を決定するモードからの解放

は、アプリアリな家内化の制約から逃れるために、「距離を置いたところに」自分自身を置くことによってもたらされる。だが誤解がないように言うと、これは制約から解放された、何でもありの思考という野望を示唆するものではない。実際、真実としての個人の意見の結びつきは、個人主義を特権化するエピステーメーに適合した表現となり、したがって、制約のどのような布置 (configuration) を実現すべきかがむしろ疑問となる。そこでのジレンマとは、ある与えられたエピステーメーの中に物質的および認知的に巻き込まれつつも、この「必要な距離」をいかに達成できるかである。場を深く掘り下げ、その深部に位置する考古学者が見るものは、いわゆる「距離の必要性」とどのように相関するのだろうか？ (批評という営みに伴う) 「距離を置く」というこの考え方は、実行可能な手段なのだろうか、そうはでないとする、エピステーメーはどのような手順によって理解可能となり、新しい歴史的な重み付けを受け入れられるようになるのだろうか？

ドナ・ハラウェイ (Donna Haraway) の「状況におかれた知 (situated knowledge)」という観点から言うと、客観的に知るモードとして距離を求めるという原理自体は「神の目 (god's eye)」の神話に陥ってしまう。なぜならばそれは、場所もなく、政治もない、実体のないものだと考えられているからだ。その神話を信じるのは「非科学者と少数の信じて疑わない哲学者」のみだと彼女は鋭く指摘する。[23] 彼女のモードはむしろ、思考の意識的な位置づけ (positioning) である。ハラウェイの「状況におかれた知」は、具体化されたフェミニストの倫理的・政治的認識論である。それを動かす基本的な前提となるのは、現実のより良い説明を構築するという作業は、知る主体 (agent) の意識的な配置 (locatability)、特に知の実践 (命題形式と暗黙形式の両方において) を形づくる特定の材料、社会的および地史的状況に結合している、ということだ。これらの「状況におかれた知」は、ハラウェイの論文が示すように、相互に作用し、現実に対する、そして現実の中での (政治と倫理) より良い説明責任を生み出すことを求める。「部分的客観性 (partial objectivity)」のモードを求める「状況におかれた知」は、具体化/場所を確認できる客観性の基礎を築く。それは同時に「すべての知の主張と、主題 (subjects) を知ることのラディカルな歴史的偶然性でありそれは[...] 私たち自身の『セミオティック

(記号論的)テクノロジー』を認識するための、意味を理解し、『現実の』世界の忠実な説明に真剣に関わるための」説明でもある。[24] 彼女の論文で注目に値する（そしてあまり議論されていない）のは、「悪意のある感覚システム」である視覚の回復である。彼女が促すのは、どこからともなく向けられる「攻略する視線」に対抗する、具現化(embodied)した視線、「刻印(mark)のない主張」をする一方で「身体に刻印(mark)」を刻む力を持つ視線であり、「表現(representation)を避けながらも表現(represent)する」力を持つ。[25] ハラウェイによると、「状況におかれた視点」からの視覚についての主張が必要なのは、「どう見るかを学ぶことに答えられる」ようにするためである。ここでは合理的な知識だと裁定されているものをめぐる闘いさえもが、「いかに見るか」との闘いと同等なのである。[26] ここで強調すべきなのは、「部分的客観性」は、エピステーメー的相対主義の実例でも申し立てでもない点である。ハラウェイは「部分的客観性」を、全体化されたビジョンの神話の「鏡に映る双子 (mirror twin)」だとして非難する。なぜならば、どの場所にでもあると主張することによって、「場所、具体化、部分的なパースペクティブ（視点）」は否定され、その結果、どの場所に置くこともできなくなってしまうからだ。[27] ハラウェイには、政治と倫理をエピステーメー的な試みから隔てるという熱意はない（客観的なイノセンスは得られるものではない）し、そしてその「部分的客観性」が存在するのは、特定の、場所を確認できる知識を「政治における連帯と呼ばれるつながりの網と、エピステーメーにおける共有された会話」において織り合わせることによって「持続的、合理的、客観的探求の可能性が存在する」ところなのである。[28]

「部分的客観性」というハラウェイの提案には、いくつかの未解決の問題があり精査されねばならないが、次の3点の確認が不可欠である。1) 知の主張はそれらが実際に引き起こす問題とは不可分である（政治的および倫理的な、本来の場所(in situ)での実際の知識の有害な(non-innocent)具体化であるとした上での知の主張との取り組み、2) 現実の説明とそれに対する説明責任との不可分性、すなわち、その可能な（不完全な）歴史に対する説明責任、3) 現実の説明および現実への説明責任の「より良くすること (betterment)」（変更についての）の主張。だが、「部分的客観性」によってモデル化さ

れないものも残る。それは、「状況におかれた知」間のつながりの網は、「より良くすること」に向けた現実の「忠実な」説明としていかに共有され、したがって一般化されてひとつにまとまるのだろうか（そのためには「会話の共有」よりも厳格さが要求される）という点である。そして逆に、共有され一般化された現実の説明は、どのように状況依存性(situatedness；埋め込まれた、置かれた状況への関わり)の位置づけに影響し、作用するのだろうか。部分的な知の主張が行われる場には忠実なのだろうか。それがエピステーメー的制約を生み出して思考の可能性を家内化してしまわないのはなぜか。言い換えれば、エピステーメーの言説的場に従った「当てはめられる真実(adaptive truths)」と、一般的な真実とを、どのように区別するのだろうか？[29] 最後に、そしてこれが重要な点なのだが、もし、「部分的客観性」が、世界に対してよりよい説明責任を果たすために、世界のよりよい説明に関わっているのだとするならば、その「部分的客観性」は、別のよりよい世界（その世界は、その場所を確認することはできず、今ここでは実現されておらず、そしておそらく実現された場はない）をいかに考えることができるのだろうか。それら別の世界のビジョンは、新たな歴史的-言説的布置に向けた合理的な闘争の一部として、どう位置付けられるのだろうか。

## 状況の再配置

「状況におかれた知」の中における位置づけは、不動ではない。状況依存性を詳しく説明するにあたって、1)直接経験を知識と同一視する、2)この場を永続的なものとしてモニュメント化する、3)「当てはめられる真実」を単に複製して歴史的-言説的封じ込めを強化する等の安易なワナに陥らないようにするためには、この点を強調しなければならない。状況依存性は、物質的にも認識的にも、場所の固定性を示すものではない。スピノザのレンズ（理性、感情、倫理が強く関わり合っていることから注目に値する）を通して、位置づけの可動性に説明可能な方法で関わることは、「経験、知識、または力を、それが与えられたという事実のみに基づいて説明するのは」まったく「十分ではない」ことを意味する。[30]

ロッコ・ギャングル(Rocco Gangle)が述べるように、「ヒトは常に与えられたものから始める、だが[...]その与えられたものが、相対的な出発点としてだけでなく、答えとして機能する場合、哲学は適切に考えることができない。」[31] これはすべての思想にとって不可避の状況である。つまり、それはある与えられた状況から始まり、ある場所、ある身体または存在 (body or entity) から始まらねばならない、たとえ思考そのものを通じて、位置の再配置が可能である場合でもだ。相対性を認識論(epistemology)と関連づけようとは思わなくても、思考の出発にあたっては、その出発点の相対的な環境状況と切り離すことはできない。

アニル・バワ=カヴィア(Anil Bawa-Cavia)は、推論を完全にスムーズで、具体化されていない (disembodied)、合理的なルールに従うシステムとしてモデル化することはできない、したがって「状況に置かれていない思考 (unsituated thought) 」には反対だとして、理性はむしろ、「欠陥のある、不完全な環境の描写(picturings)が、常に新しくなる構文的、意味的、論理的関係に置かれる、自己参照的な表現(representings)の、可塑性のある(plastic) 集合体」として機能すると記している。[32] バワ=カヴィアの状況依存性の枠組み（知性を独占するヒューマニストの自己概念を特に批判している）は、位置づけの問題はそれほど重視しておらず（ハラウェイと同様、バワ=カヴィアの理論は、認識志向というより倫理志向である）、相互作用の具体化された機会として、したがって学習のモデルとしての状況依存性を強調している。主体間の計算不可能な相互作用の出現により（時間が経過するにつれて、状況の相互作用的なダイナミクスにフィードバックする、それらの複合的な効果も含め）、状況は、いわば常に、それ自体の過剰の種を含んでいる。[33] この見解によると、状況依存性は位置づけと相互作用の継続的な連続体であると説明できる。そこでは特定の場の過剰な可能性が、相互作用を介して理解可能となり、そして与えられた場を超過した過剰なものを再度位置づけするアフォーダンス (affordance) を創り出す。この位置づけ-相互作用の連続体は、エピステーメー的（合理的な認知運動性）にも、倫理的（再位置づけの影響と取り組む）にも、よりよい説明責任を可能とするものだ。エピステーメー的な「場」とそれに特有の制約（広

い歴史的状況として) の観点から見ると、その「脱出(escape)」の可能性、その歴史的再目的化の可能性は、その完全に外にあるまたは異質な新規性の発見を条件とはしていない。歴史的不連続性を創造するための、その脱出の可能性、言い換えれば、既存の場を超過して過剰となった、既存の場とは異なる新しい場は、状況依存の相互作用(situated interactions)のレベルで育むことができる。与えられたエピステーメーを超えた過剰な状況は、知識の実定性の基礎となる新たな根拠を構築することに等しいが、それ以外の場において、それとなじみのない「場」を新たに構築することは、そこから見ることとなる新たなポジションが生成される状況依存の相互作用の結果である。

## 過剰を招く

状況依存の相互作用のすべてのモードは同じ結果をもたらす、と言うのは誠実ではないだろう。これらの状況依存の相互作用は、どのようなツールやテクニックを通じて、その与えられた状況とは異なる場の設計(engineering)に参加できるのだろうか？ このような問題は反事実(counterfactuals：実際に起こった事柄とは別の可能性)の領域に属し、「選ばれた『反事実的状況』、つまり、この世界とは別の可能世界(possible world)で、何が起こるかを検討することへの招待」だと理解される。[34] 反事実、少なくとも2つの基本的な疑問を提起する。第1に認識論的レベルでは、ある与えられた「今のこの場」—つまりある与えられた実現した世界—での経験は、実現されていない可能性の推測を、どのように正当化するのだろうか。第2に意味論的レベルでは、これらの実現されていない可能性をどのように推論して、言説的にやりとりするのだろうか。[35] 反事実、未知の世界に関わり、その未知の世界をナビゲートし得るための認知的な遊び場(play-space)を提供する。

ルース・バーン(Ruth Byrne)は、これら別世界のモデリングに必要な想像力は合理的であるが、ただしそれは、反事実的代替物が、表象的(representational)な現実像の中で、事実や(認識された)与えられた真実と、概念的に戯れたり、または精神的に事実を調

整したりして構築される限りにおいてだ、と主張する。[36] ここでの命題は、別世界について、反事実への誘いについての合理的な想像力への触媒は、フィクションを経由して、虚偽を経由して、理想化を経由して作用するというものだ。フィクション、虚偽、理想化は、文学や芸術一般の領域のみに属するのではなく、諸科学においても必要な発明であることは広く理解されている。これらのフィクション、虚偽、理想化は、現在知られていること（または知られていると考えられること）の帰納的制約に縛られない、真実をモデル化するための認知オルガノン(organon)として機能するからである。

デイヴィッド・K・ルイス (David K. Lewis) によると、「理想化とは、実際の事物を比較する上で役立つ、実現されていない事物[37]」であり、反事実的熟考を通して、そのような理想化が結果的に推論され、フィクションが想像的に分岐できる。これらのフィクションまたは理想化は、現実世界の所与性のみによって制約されるわけではない。そのために、それらのフィクションや理想化を生成でき、理解できるようにする想像上の真実とは、現在の歴史的および経験的な世界に単に当てはめられた、ジャンルに適合した表現に束縛されるものではない。それらは、与えられるものを超過して過剰となった「当てはめられない真実」であり、エピステーメーの実現された場であり、相互作用的な状況依存の世界に畳み込まれる理想-真実であり、新しい参照用の像(picture)としての社会的思考であり、そして見られるものだけでなく、別の方法でどう見るかも形づくる新たな展望なのである。

フーコーが、エピステーメーという概念の説明を、フィクションとの出会いに関する個人的な逸話の説明から始めたのは偶然ではない。それは、動物の分類図を記したボルヘスの寓話である。この寓話はフーコーにとってあまりにも奇妙奇天烈であったため、図式とは何かについて、あるいは自分にはそうは考えられない秩序づけの方法（モード）について、彼が検討するきっかけとなった。フィクションへの誘いにより、原初の言説的秩序づけのスキームの偶然性が理解可能となり、考古学的な精査への道が開かれた。以前はその原初的秩序は、単に知の基盤とならなければならない、静かにそっと与えられた事実だったのである。

ウィンターが、人間の自己概念における理想化の（社会的要因によって引き起こされた）力を強調し、生物/神話の混成物としての人間についての主張を迫られたのも偶然ではない。惑星の尺度に合わせて作られた人間であるというジャンルのために、彼女は、人間とは単なる生物的生物の生き物であり「その存在の全体的状況を確保するという必要性よりはむしろ、その存在の物質的基盤を確保するという、すべての有機種に共通の必要性に主として突き動かされる」という物語への介入を要求する。[38] このエピステーメー的なフィクションがなければ、あるいはこの概念的な自己のものがたり (self-storytelling) がなければ、アクチュアリティ (actuality) に自己比喩化されるホモ・エコノミクスは存在しない。

フーコーにとって、フィクションは与えられた歴史的言説の図式を理解するための触媒となった。ウィンターにとっては、それは人間の自己概念のフィクションであり、ある社会的布置 (social configurations) のアクチュアリティを導き、生み出す。そしてそれらの社会的布置とは、その理想化された人間のジャンル-概念への適応を促すものなのである。フィクションと理想化は、何かを理解可能にするための手段として使われるのであれ（進化のプロセスをより分かりやすくしようと試みる無数の人々のように）、あるいは物質的な現実には直接介入するモデル（金融分野におけるプロトタイプのように）として使われるのであれ、無害ではなく、中立的なオペレーターでもない。フィクションには、物質的、政治的、倫理的、そしてエピステーメー的な結果がある。だからこそ、それらに対する説明責任が必要なのだ。しかし、発明されたときにそれらはまだ現実を形づくっていないがために（あるいはまだ、現実に関係さえしていないがために）、それらの影響を通して考えることは、反事実の世界、つまり過剰な場にしか、状況づけられないのかもしれない。

## 非現実性の受け入れ

強力で支配的で膨張した歴史的-言説的な home であり、別世界の布置(otherworldly configurations)を考える可能性を制約してきた現在のエピステーメーから脱出するとするならば、単に現実を説明する、単に与えられたものを説明するのも必要だが、それだけでは十分ではない。この歴史的現在の危機に対する説明責任を果たすには、フィクションの介入可能性が必要となる。そのフィクションとは、反事実に状況づけられて分岐し、別の歴史を理解可能とし、歴史の不完全性を明らかにするものだ。現在の歴史的言説的な home では、「家具」を再配置するだけでは十分ではない。この与えられた家内状況とそのロジックに従う家内化のモードから自由になるかどうかは、比較対象となるフィクションを構築する自由があるかどうか依存している。その比較のフィクションは、新しい home を基礎から建てるための思考と活動の基盤となる、新しい実定性の場のツールとなる。

「より良くすること(betterment)」への欲求はそれ自体、フィクションに絡み合っている。なぜならば、「より良いもの(the better)」は今この場では常に実現されておらず、「より良いもの」は直接経験に、経験的に得られるものではないからだ。局地的な経験と思考可能性に今この場で与えられたもののみを説明することは、「状況に依存してより良くしていく(situated betterment)」想像上の可能性を排除することだ。「より良くすること」は常に別世界、別の場、別の状況に属し、その可能な世界についての反事実的な想像力は、フィクションを通じて働かせられるようになる。ネガレスタニが述べるように、「より良くする」ためのフィクションは本質的に危険なものだ。なぜならば、その実現は「homewrecking (home を破壊する)」作用を伴うからである。[39]

しかし、この破壊という意味合いは方程式の一方の側にすぎない。なぜなら、この否定を肯定することは、home を発明し、世界を構築するための新しい経路の推論を必要とするからだ。可能性の空間の基礎となる与えられた歴史的な場が、不完全で、未完成で、非合計的なものだと理解されてはじめて、その経路は理解可能となる。

アレクサンドル・グロタンディーク(Alexander Grothendieck)は、これらの新しい経路は「家を基礎から屋根まで建てるためだけではなく、将来のキッチンや作業場を充実させ、家を整えて快適に住めるようにするための、工具、用具、家具、必要な機器」[40]を創り出し、かたちを与えるという喜びを伴う、と述べている。惑星の尺度の環境の中で共存するチャンスがあるとすれば、別世界のために、現実化されていない場のために、新しい歴史の可能性のために、共存を導き、形づくり、重みを加える「より良くする」ためのフィクションの必要性は差し迫っている。

今日、人類の多くが（人類以外はもちろんのこと）、この特定の歴史的エピステーメーの膨張した **home** の影響による、直接的かつ実存的な脅威にさらされている。それは、暗喩的にも、言語的にも、社会的にも、無数の「**homeless**（ホームレス）」を実際に生み出す脅威だ。そのようなとき、「当てはめられる真実」の再生が質的に、その言説的制約とその結果として生じる規範的コミットメントの名の下に起こった大惨事に答えることはほとんど期待できない。現実化されていない歴史的-言説的サイトを説明するために必要なのは、「当てはめられる真実」からの自由である。「当てはめられる真実」は、既存の参照フレームを強化するだけでなく、その不変性の認識にも加担しているからだ。さらに、このようなエピステーメーを実現可能とし得る場—今この場で状況依存的に与えられたまたは考え出されたものを超えた過剰な場—常にリスクのある命題—に対する説明責任に必要なのは、概念的な遊び「場」、想像上の実験「場」であり、その「場」の条件としては、その歴史的な実現可能性(**historical enablement**)という別世界の状況と互いに影響し合う手段としてのフィクションを構築する自由が必要となる。

---

[1] Michel Foucault, *The Order of Things: An Archaeology of Human Sciences*, (London: Routledge, 2005), xxii. 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』新潮社、1974年、p.18-19.

[2] *Ibid.*, xxiii 同上 p.13, p.20.

[3] *Ibid.*, xxvi. 同上 p.23.

- [4] David Scott, Preface to “The Re-Enchantment of Humanism,” (Interview with Sylvia Wynter), in *Small Axe* 8, 2000, 119–207. Retrieved here: <https://libcom.org/library/re-enchantment-humanism-interview-sylvia-wynter>
- [5] Michel Foucault, *The Order of Things*, xxiii 『言葉と物』
- [6] Ibid., 56. 同上 p.56.
- [7] John K. Simon, “A Conversation with Michel Foucault” in *Partisan Review* 38, 1971, 192–201.
- [8] Sylvia Wynter, “A Ceremony Must Be Found: After Humanism,” in *boundary 2*, vol. 12, spring-autumn 1984, 19-70.
- [9] Sylvia Wynter, “Towards the Sociogenic Principle: Fanon, The Puzzle of Conscious Experience, of “Identity” and What it’s Like to be “Black,” in *National Identities and Sociopolitical Changes in Latin America*, eds.: M. F. Durán-Cogan and A. Gómez-Moriana, (New York: Routledge, 2001) 30–66.
- [10] Sylvia Wynter and Katherine McKittrick, “Unparalleled Catastrophe for our Species,” in *Sylvia Wynter: Being Human as Praxis*, ed. K. McKittrick, (Durham: Duke University Press, 2015), 32.
- [11] Sylvia Wynter, “No Humans Involved: An Open Letter to My Colleagues,” in *Forum N.H.I.: Knowledge for the 21st Century*, vol. 1: Knowledge on Trial, 1994, 42-70. This essay-letter was written in the wake of the Los Angeles riots in 1992, subsequent to the acquittal of L.A.P.D. officers captured explicitly on video violently beating Rodney King.
- [12] Derrick White, “Black Metamorphosis: A Prelude to Sylvia Wynter’s Theory of the Human,” in *CRL James Journal*, Vol. 16, 2010, 127-148.
- [13] Yuk Hui, “Cosmotechnics as Cosmopolitics,” in *e-flux Journal* #86, Nov. 2017. Accessible here: <https://www.e-flux.com/journal/86/161887/cosmotechnics-as-cosmopolitics/>
- [14] Katherine McKittrick, “Unparalleled Catastrophe for our Species,” 10.
- [15] Sylvia Wynter and Katherine McKittrick, “Unparalleled Catastrophe for our Species,” 24.
- [16] Sylvia Wynter, “A Ceremony Must Be Found: After Humanism”.
- [17] David Scott, Preamble to Sylvia Wynter, “The Re-Enchantment of Humanism,” (David Scott, Interviewer), in *Small Axe* 8, 2000, 119–207. Retrieved here: <https://libcom.org/library/re-enchantment-humanism-interview-sylvia-wynter>
- [18] Reza Negarestani, *Intelligence and Spirit*, (New York/Falmouth: Sequence Press: 2018), 491.
- [19] Ibid., 63.
- [20] Ibid., 63.
- [21] Ibid., 491.
- [22] Nora Khan, “Seeing, Naming, Knowing,” in *The Brooklyn Rail*, 07 March, 2019. Available here: <https://brooklynrail.org/2019/03/art/Seeing-Naming-Knowing>
- [23] Donna Haraway, “Situated Knowledges: The Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective,” in *Feminist Studies*, Vol. 14, No. 3. (Autumn, 1988), pp. 575–599.
- [24] Ibid.
- [25] Ibid.
- [26] Ibid.
- [27] Ibid.
- [28] Ibid.

- [29] Sylvia Wynter and Katherine McKittrick, “Unparalleled Catastrophe for our Species,” in *Sylvia Wynter: Being Human as Praxis*, ed. K. McKittrick, (Durham: Duke University Press, 2015), 32. The term ‘adaptive truth’ is borrowed from Katherine McKittrick’s introduction in the same volume “Yours in the Intellectual Struggle: Sylvia Wynter and the Realization of the Living”, 1–8.
- [30] Rocco Gangle, *Diagrammatic Immanence: Category Theory and Philosophy*, (Edinburgh: EUP, 2016), 20.
- [31] Ibid.
- [32] Anil Bawa-Cavia, “The Inclosure of Reason” in *Technosphere Magazine*, 2017. Accessible here: <https://technosphere-magazine.hkw.de/p/The-Inclosure-of-Reason-ecTsvnENeC1GXtmgRNaMH9>
- [33] Ibid.
- [34] David K. Lewis, *On the Plurality of Worlds*, (Oxford: Blackwell, 1986), 22. [Emphasis by the author]
- [35] William Starr, "Counterfactuals", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2019 Edition), ed.: Edward N. Zalta, Accessible here: <https://plato.stanford.edu/archives/spr2019/entries/counterfactuals/>
- [36] Ruth M. J. Byrne, *The Rational Imagination: How People Create Alternatives to Reality*, (Cambridge: MIT Press, 2005), 3.
- [37] David K. Lewis, *On the Plurality of Worlds*, 28.
- [38] Sylvia Wynter, “No Humans Involved,” 49.
- [39] Reza Negarestani, *Intelligence and Spirit*, (New York/Falmouth: Sequence Press: 2018), 487.
- [40] Alexander Grothendieck, *Récoltes et Semailles* (Université Montpellier, 1986) trans. Roy Lisker. Part I available here: <https://uberty.org/wp-content/uploads/2015/12/RS-grothendieck1.pdf>